

解離の治療

トラウマ関連解離／構造的解離の実践統合アプローチ

キャシー・スティー爾, スゼット・ブーン,
オノ・ヴァンデアハート著
新谷宏伸訳

金剛出版, B5判500頁, 13,200円, 2025年7月刊

(医療法人社団心清会) 蒲生裕司

なんといっても500ページの厚さだ。手に取る前に、既に背筋が伸びきる。さらに、手に取るとズシリとした重さに恐れ慄く。何しろ1.2kgの重量だから当然だ。そして、覚悟してページを開くと、そこには、解離症の臨床に関する精緻な枠組みが隙間なく張り巡らされ、事例と技法が幾層にも積み重なっていることに気づく。その密度は、読者にため息をつかせる。最初の数ページで「ああ、これは気軽なハイキングなどではない。ガチの登山だ」と悟るだろう。

『解離の治療—トラウマ関連解離／構造的解離の実践統合アプローチ』は、「日常生活で機能するパート」と「トラウマ時間に囚われたパート」が同居する、人格の「解離性パート」という概念を出発点に、三段階の治療過程——解離性パートへのアプローチ、トラウマ記憶の治療、結束した人格への統合——を徹底して説く。

難所に差しかかると一旦引き返し、関連する章や脚注を読み直し、理解を深めてから再び進む。この往復運動は、まるでセッションで安定化に戻るプロセスそのものだ。忍耐、反復、安全に配慮された順序、そして「今日はここまで」という見極め。ページをめくる行為が、急ぎすぎれば破綻し、時には重

に進めても振り出しに戻るという、臨床の所作にそのまま重なってくる。

その道のりを支えてくれるのが、訳者・新谷宏伸先生の仕事だ。原著の長大で複雑な英文は、日本語の呼吸に合わせて切り分けられ、意味が段階的に理解できるよう、しっかりと整えられている。専門用語は既存の学術用語と照らし合わせつつ誤解を避け、会話例は日本の臨床現場で口にしても自然に響く。時に、訳文のリズムに導かれながら、「いま私は訳者のセッションを受けているのではないか」と錯覚する瞬間さえある。卓越した臨床家に背後からそっと支えられ、時に優しくタッピングされながら、背負ったリュックの重みを分かち合って登っていく感覚だ。

そうして最後まで登り切ったら、その頂上からは、今まで見ることができなかった景色の広がりを眺めることになる。断片だった知識や症例が一枚の地図のようにつながり、解離という山脈全体を見渡すことが可能となる。そこには、これまで陰しく感じられた解離の臨床というルートの中に、実は緩やかな尾根もあることに気づかされ、次の一步を選ぶ勇氣が湧いてくる。この眺望こそが、本書を読み通した者への最大のご褒美だ。

もちろん、この本にも限界はある。構造的な解離理論を中核に据えているため、他の治療モデルに慣れた臨床家には用語や理論にとっつきにくさを感じるかもしれない。また、訳書の制約として避けられないことであるが、記述されている人間関係や家族観をそのまま日本の文化に適用するには、若干の工夫が求められるであろう。

それでも、この分量と密度を読み切ること自体が、焦らず、安全を確保し、必要に応じて振り返る力を鍛えることになる。すなわち、これこそが著者と訳者によって仕掛けられた実に巧みなセラピーであり、スーパーバイズなのだ。

さあ、備えは十分だ。安心して解離の臨床に足を踏み出そう！

原書：Kathy Steele, Suzette Boon, Onno van der Hart : Treating Trauma-Related Dissociation : A practical, integrative approach